

## はじめに

### そのままのわたし

ボランティアセンター長 中川 英樹

ここに2023年度のボランティアセンターの活動報告書をお届けいたします。今年度、私たち立教大学ボランティアセンターは設立20年という大いなる歓びの時の中を涉り往きました。このセンターの働きをずっと支えてきてくださった教職員の皆さま、協力を惜しまず、いつも関わってくださる池袋・新座の地域社会連携関係者の皆さま、そして様々な活動の場を提供してくださっている教育・福祉等ボランティア関連団体の皆さま、加えて、その活動につながってくれている学生たち、また今は大学の職を離れて居られる方々、さらに既に天に召された方がた、それら、すべての人びと、そのお一人おひとりの存在があって、わたしたちの「今」があることを覚えます。

さて、立教大学はキリスト教信仰に基を置く教育機関ですが、この学び舎は「使徒聖パウロ」を守護聖人としています。パウロという人は、キリスト教の基礎を築いた、偉大な宣教師として教会の歴史に記録されていますが、パウロはキリスト教徒なるまで厳格なユダヤ教徒でした。パウロはユダヤ教の律法を忠実に守り、罪を犯さないように戒律を遵守し、禁欲的な生活を送り、その努力、力を酷使し、徳を積んで往く、その実践の先で神の「救い」に与れると信じていました。けれど、どんなに律法を忠実に守っても、禁欲的な生活を実践しても、神の救いに与った、神の恵みに満たされた、と実感することはありませんでした。そんなパウロがはじめて「救われた」と心の底から感じる事ができたのが、復活のイエスと出会い、そのイエスを通して、「強さ」ではなく「弱さ」に、「できること」ではなく「できないこと」に、「大きいこと」ではなく「小さいこと」にこそ、神は目を注がれることを知ったときでした。このときパウロに生じたできごとを、キリスト教会は「パウロの回心」と呼ぶのですが、このパウロの回心は、こうでなければならぬ…… こうすべきだ…… そういう、一定の常識とか、既成の価値観を手放したとき、人は、ほんとうの「そのままのわたし」を生きられる、ということをおわたしたちに教えています。「そのままのわたし」とは、真実の人との出会いの中で、苦勞も、無理も、不器用さも、失敗も、肯定されることで出会うことができる「わたし」のことです。

大学という場所は、決して人を幸せにすることのない形骸化した価値観やシステムを刷新し、新しい価値や哲学を創り出して往く場です。新しい価値観や哲学、文化を創り出して往くとき、そこに必要なものは対立や否定ではありません。対立は、次の対立しか生みません。否定は、否定の連鎖にしかなりません。何かを否定して得たものは、いずれまた否定されて失われていきます。まずは、一人ひとりが「そのままのわたし」をちゃんと生きる必要があります。立教大学ボランティアセンターは、立教で学ぶ学生各々が、「そのままのわたし」に出会って往くため、「響き合い」と「つながり合い」という創造的な仕掛けをつねに提供し続ける所でありたいと願います。

最後になりますが、本年度もわたしたち立教大学ボランティアセンターの働きにご協力いただきましたすべての皆さまに御礼申し上げ、巻頭のご挨拶とさせていただきます。

## 震災被災地者としての個人的体験から

ボランティアセンター副センター長 結城 俊哉

2024年の幕開け（元旦）は、能登半島地震で始まった。

今の時点（1月15日）でもニュース報道（テレビ・ラジオ等）は石川・富山・福井の北陸3県と新潟の震災被災地の被害状況や震災被災者の避難所生活の様子を伝えている。

以下に極めて個人的な震災体験について書くのでお付き合い願いたい。

それは、僕が保育園児の6歳の1964年（昭和39年）6月16日の午後1時1分に起こった新潟地震（震源地は粟島沖・M7.5）だ。いまでもその頃の記憶がフラッシュバックのように震災報道に接する度に思い出すことがある。具体的には、信濃川の氾濫や、自宅が全壊したため仮設住宅としてバス会社が提供してくれた1台のバスの中でしばらく家族の皆が暮らしたこと、そして、自衛隊の給水車から水をもらうために家族で並んでいたこと。さらに、地震当日の夜中、自宅裏の畑の中で毛布に包まりながら昭和石油のタンクが黒い煙を上げながら赤々と燃えていた不安な光景が今も僕の記憶の中にある。あれから59年の時間が経過したのだった。その間、この日本はボランティア元年とも呼ばれる1995年の阪神淡路大震災、2011年には東日本大震災と福島原発事故という自然災害と人災とも呼べる原発事故を経験することになった。そして僕は、今も震災被害のニュース報道に接すると何故か胸が痛くなり、悲しい感情が湧き上がり辛くなり、テレビやラジオのスイッチを切ることがある。そのためか、僕は、しばらくの間、震災の被災地に行くことができないでいる。

今回、今年度のボランティアセンターの活動報告書に僕の個人的な震災被災者体験を書いたのは、学生の皆がボランティアとしてボランティア活動に参加する際、ボランティア先の現地には「平和な日常」を喪失した人々が抱えている「痛みと悼みの感情」に思いを馳せてほしいと思ったからなのである。私たちの「平和な日常」は、当たり前のものでなく「自然の脅威」や愚かな人間達の「戦争」によって、常に注意してしっかり手に抱えておかないと一瞬で壊れてしまう「ガラス玉」のような「かけがえないもの」なのだという感覚を忘れないでいてほしいと願っている。そうであれば、皆が取り組むボランティアとしての実践はいつか必ずお互いに大いなる「ギフト（＝人生を生きる意味）」をもたらすことになるのだと信じている。

## ボランティアセンターの次の10年へ向けて

ボランティアセンター副センター長 伊藤 実歩子

ボランティアセンターの副センター長を拝命して1年が過ぎようとしています。20周年記念イベントとして、東日本大震災をふりかえる公開シンポジウム「Fukushimaは世界でどのように報道されているか」を開催し、多くの方にご参加いただいたことに、心より感謝申し上げます。

同センターを含め、大学での諸活動、とりわけ課外においては、コロナ禍による活動の停止、自粛や制限を乗り越えて、こうした活動を全面的に再開することができた1年でした。

再開した活動の報告や参加した学生の様子などを見聞するたびに、教育学者として自問自答することがあります。それは、「大学の講義はボランティア活動以上の学びや気づきを学生に提供することができるか」ということです。

ボランティア活動とサービス・ラーニングは、課外と正課などカリキュラム的に厳密には分けて語られなければなりません。学生の主体的な活動を基本とする点や教室の外で行われるといった共通点があります。一般的に、座学よりも、経験をともなう学習のほうが深い理解をもたらすといわれています。ボランティア活動を報告する学生たちの姿を見ると、このことを非常によく理解することができます。彼女ら彼らは自分たちのボランティア活動から社会の構造や問題を理解し、自分たちの持っているさまざまな能力や技能を総動員して解決しようとし、また次のボランティア活動につなげていこうとします。これが高等教育における真正の学びのあり方であると同時に、これからの社会に必要とされている能力でもあります。ボランティア活動に従事する学生及びスタッフから学ぶことはたくさんあります。

上述のシンポジウムに登壇したユーディット・ブランドナーは、学生から「オーストリア人が、なぜ遠く離れた東日本大震災の原子力発電所事故の問題に関心を持つのか」という質問に対して、次のように答えました。

「フクシマはオーストリアから遠いところで起こった話ではありません。ヨーロッパは、過去にチェルノブイリ原子力発電所の事故、現在はウクライナのザポリージャ原発の危機を経験しています。残念ながら、フクシマは遠く離れた場所のことでも、過去のことでもありません。」

ボランティア活動は、自発的な意志に基づき他人や社会に貢献する行為です。わかりやすく言えば、自分の周りにいる少し困っている隣人たちに手を差し伸べることで成立します。そうした活動を通して、学生たちはこれからの社会をどのように構想するのでしょうか。ボランティア活動という具体の経験は、この不確かな世界の構想を、まだ見ぬ他者を含みこんだ大きなビジョンを提示する素地となるでしょう。

2003年度に設立された立教大学ボランティアセンターはみなさまのおかげをもちまして20周年を迎えることができました。これまでにご尽力いただいたすべての関係者、学生にあらためて感謝申し上げますとともに、同センターの発展をこれからも学生とともに作りあげていきたいと存じます。どうぞ皆様のご協力をよろしくお願いいたします。